A日程

二〇二二年度
尚絅学院高等学校
入学試験問題

国　語

試験時間（五〇分）

注　意　事　項

一. 「始め」の合図があるまで問題の表紙を開かないでください。
二. 解答用紙には決められた欄に受験番号のみ記入し、氏名は書かないでください。
三. 解答は必ず解答用紙のそれぞれ決められた欄に記入してください。
四. 印刷が見えにくい場合は、手をあげて監督者の指示に従ってください。
五. 考査が終わったら、解答用紙と問題用紙を別々にしておいてください。
六. その他すべて、監督者の指示に従ってください。

受験番号	

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

万里の姉、千里は生まれてすぐ亡くなった。この日は千里の命日である。万里の母の和美は看護師。小太郎は飼い犬である。

「死んだら、赤ちゃんはどこへ行くの？」

「え？」という形に和美の口が開いた。そして、しばらくそのまま万里の顔を見つめていたけれど、すぐにプロフェッショナルの顔に戻った。

「どこへ行くんかねえ。お母さんにもようわからんけど」

言葉を探しながら、和美は足をくずして体育座りになった。指は小太郎のお腹をまさぐっている。つられて万里も向き合って座る。背中がこわばっていた。母親と向き合って緊張するなんておかしい。そう思うけれど、自然とそうなってしまう。だけど今は、聞きたい気持ちのほうが強かった。

「赤ちゃんの意思を感じることはある」

「赤ちゃんの意思？」

自分ではしゃべることもできないあんな弱々しい赤ちゃんに、意思なんてあるんだろうか？

「お産に少々問題があっても、『生まれたい』って強く思ってる子は、どうやってでも生まれてくる。だけど逆に、『え、どうしてこの局面で』って思うくらいあっさり死んでしまう赤ちゃんもいるのよ」

「……」

「そんなときは、『ぼく、今度にするよ』っていう赤ちゃんの意思を感じるの」

A 時間が止まっていた。

和美の声は深くて静かだった。それは、何度も何度もいのちの修羅場を経験した人独特の、静けさのように万里には思えた。和美とこんな話をするのははじめてだった。

あらためて万里は、和美を取り巻くものの厳しさと、そこで毎日闘っているすごみとを感じた。

「でもね、赤ちゃんてやさしいのよ。周りの人へ愛を残していく。だからかなあ。死んだらそれで終わりとは、お母さんにはどうしても思えんのよ」

「どういうこと？」

万里の声はかすれていた。だって、死んだら終わりじゃん。千里ちゃん、ここにいないじゃん。いて、あたしの話を聞いてくれたら、どんなにいいか。思ってもいなかったことに、のどがせりあがった。

「百まで生きる人も、生まれてすぐに死んでしまった赤ちゃんも、いろいろな思いを人の心に残すという意味では、いのちの価値はおんなじだと思う」

和美は砂浜で言葉のかけらを拾い集めるように、X 話した。和美の指にまさぐられて気持ちよくなったのか、小太郎はころんと腹を上に向けて大の字になった。万里はごくりとつばをのみこむ。……よくわからない。B

「お母さんね、千里のことがあってから、世界の見え方がちがってきた」

「世界の見え方？」

「うん。それまでももちろん一生懸命仕事してたし、相手の立場になって考えてるつもりだったけど、今から思うと方向ちがいだったなあって思うことがよくあるもん」

「和美ぃ、オーブンがチンゆうたけど、このままにしといてええのんかあ」

台所からばあちゃんがどなっている。

「うん。そのままにしといてぇ」

大声で答えてから万里に向き直ると、

「万里とこんな話するの、はじめてだね」

と、和美はまぶしそうに、それでも Y 万里の目を正面から捉えた。

「なんか、お母さん、うれしい」

「……うん」

ほんとうは万里もうれしかった。だけど素直に認めたくなくて、うつむいた。

「千里はあっちに行っちゃったけど、ずっとお母さんの心にいるし、今でもいろいろな気づきをくれる。だから、千里との時間はずっと続いてる気がする」

お母さん。お母さんは気づいていないかもしれないけど、C あたしにはそれが苦しい。だって、お母さんはいつも、千里ちゃんというフィルターを通してしか、あたしを見ない。あたしそのものを、見てくれない。いいたかった言葉をのみこんで、万里は小太郎のお腹に顔をうずめた。小太郎のお腹はほんのりお日さんの匂いがした。

「そうはいってもね」

和美の声に寂しさがにじんだ。

「やっぱり心のどこかで、元気に産んであげられなくてごめんねって、申し訳なく思ってる自分がいる。万里だって、お姉ちゃんがいたらよかったのにって思うでしょ」

とつぜん話を振られて、とまどった。

「思うけど、……しょうがないよ。D 運命だよ」

思ってもいなかった言葉が口から飛び出した。

「運命かあ。はっはっは。大きく出たね」

和美が白いのどをのけぞらせて笑うと、仏壇の灯明が揺れた。部屋の空気が丸くなったのがわかった。え？　千里ちゃん、お母さんが笑ったのがうれしいの？　E万里は目を丸くして、仏壇の写真を見つめた。

「そうだよね。『七歳までは神のうち』っていうもんね。さ、お腹すいたでしょ。冷めたら大変。グラタン、グラタン」

よいしょと掛け声をかけて、和美は立ちあがった。よほど疲れているのか、立つとき足がふらついた。

（八束澄子（やつかすみこ）「いのちのパレード」による）

問一　空欄［　X　］、［　Y　］に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　X　もごもごと　　Y　はっきりと
イ　X　たんたんと　　Y　ひしひしと
ウ　X　ぽつりぽつりと　　Y　しっかりと
エ　X　のらりくらりと　　Y　まじまじと

問二　A「時間が止まっていた」とあるが、このときの万里の気持ちとして最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　和美が経験したであろう数々のいのちの修羅場を想像して、落ち着きを失っている。
イ　和美を取り巻くものの厳しさと日々の闘いの激しさを知り、強い驚きを覚えている。
ウ　和美の神秘的な経験による現実離れした言葉から、普通でない静けさを感じている。
エ　壮絶な経験に裏づけられているであろう和美の言葉に、ただならぬ深みを感じている。

問三　B「よくわからない」とあるが、それはなぜか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　和美は、百まで生きる人も赤ちゃんもいのちの価値は同じだと思っているが、万里は、自分が会いたいと願う人のいのちは特別なものであると感じているから。
イ　和美は、死を終わりと考えず、周囲に愛を残すことにいのちの価値を感じているが、万里は、死んだらもう会うことはできず、終わりだと思っているから。
ウ　万里は、千里が生きていたらどんなにいいかと感じているので、千里の亡くなったあとに世界の見え方が変わったという和美の心を想像するのは難しいから。
エ　万里は、千里に会えないことからも、死んだら終わりだと思っているので、死を終わりだと考えていない和美の小太郎の扱い方に納得がいかないから。

問四　C「あたしにはそれが苦しい」とあるが、万里が「苦しい」と感じているのは、どのようなことか。「和美」「心」という言葉を使って、五十字以内で書きなさい。

問五　D「運命だよ」という言葉についての説明として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　気持ちの整理がつかないまま、思いがけず言った言葉。
イ　とまどいつつ、いらだちや怒りをぶつけようとした言葉。
ウ　一瞬の間に深く考えをめぐらせ、意図して発した言葉。
エ　考える気力がわかず、よくわからないまま言った言葉。

問六　E「万里は目を丸くして、仏壇の写真を見つめた」とあるが、このときの万里の心情について説明したものとして最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　仏壇の灯明が揺れて、和美に対する千里の親しみが表れたように感じ、死者である千里に裏切られたような気がしている。
イ　仏壇の灯明が揺れて、和美と話していた空間の雰囲気が和らいだのを感じ、死者である千里の存在を近くに感じている。
ウ　仏壇の灯明が揺れて、和美といた部屋の空気が丸くなったが、死者である千里が炎を揺らしたとは信じられないでいる。
エ　仏壇の灯明が揺れて、死者である千里の気持ちを感じ取った和美がやっと笑ってくれたので、本当によかったと思っている。

問七　この文章の表現の特徴として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　現在の場面に回想の場面が差し挟まれるのをきっかけに、主人公の心境が変わるさまが描写されている。

イ　会話文が多く用いられることで、主人公と相手との心情のすれ違いが臨場感をもって描かれている。

ウ　主人公の心の中の言葉が挿入されることで、展開に伴う心情の移り変わりがわかりやすく表現されている。

エ　細かい情景描写が重ねられることでリズムが生じ、刻一刻と変化する主人公の心情が表されている。

〈問題は次ページへつづく〉

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いまの若者たちはほんとうに厳しく、生きづらい時代を生きていると思います。

僕が10代だった１９６０年代は明るい時代でした。

米ソの核戦争で世界が滅びるのではないかという恐怖がつねにありましたけれど、そんなことを日本人が心配しても止める手立てもない。だったら、「どうせ死ぬなら、いまのうちに楽しんでおこう」というワイルドでアナーキー[*1]な気分があふれていました。幸い、どんなに騒いでも、憲兵隊[*2]や特高が来る心配はない。だから、風通しのいい時代でした。

いまの日本の社会はA｜それに比べると、ほんとうに風通しが悪いですね。息が詰まりそうです。狭い「金魚鉢」のようなところに詰め込まれているような気がします。

世界は移行期的混乱のうちにあり、あらゆる面で既存のシステムやルールが壊れかけている。［X］、日本の社会はその変化に柔軟に対応できずに硬直化している。金魚鉢にひびが入り、いまにも割れて中の水ごと外に放り出されるかもしれないのに、若い人たちは、相変わらず「金魚鉢の中の」価値観や規範に適応するように求められている。むしろ、外側で大きな変化が起きている分だけ、恐怖と不安で、硬直しているように見えます。

激動期に対応して、生き残るためには、集団の一人一人が持っている多様な能力や資質を生かして、「強い」チームを形成しなければいけないのですが、日本の学校教育は単一の「ものさし」をあてがって子どもたちを格付けして、スコアの高い者には報酬を与え、低い者には処罰を与えるということだけしかしていない。多様な才能や資質を開花させるためには、ほとんど何もしないで、ただ「みんなができることを、他の人よりうまくできる」競争に若者たちを追い込んで、消耗させている。こんな［Ⅰ］な優劣を競わせても、来るべき変化に備え、それを生き延びる知恵と力を育てるのには何の役にも立ちません。

なぜこんなことになるのか。

理由の一つは、超少子化のせいで子どもより大人の数が［Ⅱ］に多く、大人による管理と監視が強まっていることです。社会全体に「すき間」や「遊び」がなくなった。「大人の目が届かない場所」がない。［Ⅲ］にないのです。僕らの時代には大人の知らない場所、大人の指示も干渉も届かない場所がそこここにあった。大人たちも生きるのに必死で、子どもたちのことなんか構っていられなかったんでしょう。その放任のおかげで、子どもたちは自由気ままに遊べた。

［Y］ＳＮＳで子ども同士のコミュニケーションは便利になりましたけれど、そのシステムを設計し管理しているのは大人たちです。そこで展開されているのは、僕らが中学生の頃に仲間うちでやっていたような「地下活動[*3]」や「レジスタンス」ではありません。全部が管理されて、「ビッグデータ[*4]」に書き込まれている。だから、コミュニケーションの場そのものにも管理の網が張り巡らされ、強い同質化圧が働いている。

そもそもコミュニケーションということの意味が誤解されているのかも知れません。

先年大学で短いレポートを課したら、B｜「私、コミュ障なんです」と書いてきた学生が数人いました。「コミュ障」という言葉をその時にはじめて見て、たぶん「コミュニケーション障害」の略語なんだろうとは思いましたが、どういう意味で使っているのかわからない。

よくよく読んでみると、学生たちが「コミュニケーションが成立している」と見なしている事態とは、誰かが「あの店のケーキ、美味しいよね」「この服かわいいよね」というようなことを言うと、周りが一斉に「そうそうそうそう！」と手を叩いて、激しく頷くようなふるまいを指しているらしい。全面的な同意と共感を誇示することを「コミュニケーションが成り立っているさま」だと思い込んでいるらしい。でも、自分は他の学生の言うことにいちいち首がちぎれるほど頷いたり、手が腫れるほどハイタッチしたりすることができない……。きっと、こんな私はコミュニケーションができない人間なんですと「カミングアウト」しているわけです。

C｜コミュニケーションが「そういうもの」だと思っていたら、たしかに日々がさぞやつらいことでしょう。

同意や共感にだって、「そこそこ共感できるけれども、違和感が残る」とか「理解はできるが、共感できない」とか「意味がわからないが、なんとなく腑に落ちた」とか、さまざまな濃淡の差がある。それを言葉にして、やり取りを重ねていくうちに、お互いの理解が深まったり、違いを認め合ったり、調整したり、合意形成を果たしたりできるようになる。それが対話であり、コミュニケーションだと僕は思います。

コミュニケーションすることの最大の喜びは、自分が思いもしなかったアイディアを他人から得ることや、自分とは違う感受性を通じて経験された世界を知ることにあると僕は思っています。自分の感情や思考を他人にまるごと肯定してもらっても、うれしいけれど、それによって自分が豊かになるわけではない。対話することの甲斐は、対話を通じて自分が豊かになり、より複雑になることでしょう？

（中略）

自分たちがいま生きている社会が金魚鉢のように閉ざされた狭い空間であることに気づいて、生き延びる道を見つけること、人文学を学ぶ意味は、そこにあります。

人文学というのは、扱う素材の時間軸が長く、空間も広い。考古学や歴史学なら何千年、何万年前のことを扱うし、民俗学や地域研究では、はるか遠い国の文化を学びます。文学もそうです。遠い時代の、遠い国の、人種や信仰や性別や年齢が違う人の中に想像的に入り込んでいって、その人の心と身体を通じて世界を経験する。「いま、ここ、私」という基準では測り知れないことについて学び、理解するのが人文学です。

学ぶことによって、自分たちが閉じ込められている「金魚鉢」[D]のシステムや構造を知り、それがいつどんな歴史的条件下で形成されたものであるかを知り、金魚鉢の外側には広い社会があり、見知らぬ世界があり、さらにそれを取り巻く宇宙があることを知る。金魚鉢も含めた世界はどこから来て、いまどんな状態にあって、これからどう変わっていこうとしているのか、それは金魚鉢の中にいながらでも学ぶことができます。これが人文学を学ぶということです。この混乱期を生き延びてゆくためには、できるだけ視野を広くとって、長い歴史的展望の中でいまの自分を含む世界の風景を俯瞰（ふかん）することが必要です。

（内田樹（うちだたつる）「生きづらさについて考える」による）

【注】

＊1　アナーキー…無秩序の状態にあること。

＊2　憲兵隊や特高…「憲兵隊」は、軍事警察をつかさどる兵隊。「特高」は、思想犯罪に対処するための警察で、第二次世界大戦後に廃止された。

＊3　「地下活動」や「レジスタンス」…「地下活動」は、秘密に行う非合法の社会運動。「レジスタンス」は、抵抗運動。

＊4　ビッグデータ…人々が生活の中で用いる通信機器に集積された、膨大な量のデータのこと。

問一　空欄［X］、［Y］に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。同じ記号は二度使えません。

ア　むしろ　　イ　それなのに　　ウ　それだから　　エ　たしかに　　オ　なぜなら

問二　空欄［Ⅰ］、［Ⅱ］、［Ⅲ］に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。同じ記号は二度使えません。

ア　創造的　　イ　相対的　　ウ　物理的　　エ　具体的　　オ　圧倒的

問三　「それ」[A]が表している内容として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　世界が滅びるかもしれないという恐怖を感じる反面、どうせ死ぬのだからと思って自暴自棄に生きていた時代。

イ　国際情勢に不安はある反面、気楽で野放図な雰囲気があって特定の価値観や基準にしばられなかった時代。

ウ　世界が滅びるかもしれないという恐怖を感じつつ、憲兵隊や特高から隠れて自由を大いに楽しんでいた時代。

エ　国際情勢が緊迫している中において、日本人としての役割を互いに自覚しながら生活を楽しんでいた時代。

問四　「私、コミュ障なんです」[B]という言葉をこの学生がどのような意味で使っていると、筆者は考えたか。解答用紙の「自分は、……という意味。」に当てはまる形で、……のところを四十字以内で書きなさい。

問五　「コミュニケーション」[C]とあるが、筆者の考えるコミュニケーションとはどのようなものか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア　互いの違いを認め合ったり調整したりすることにより、自分の感情や思考を他人にまるごと肯定してもらえるもの。

イ　やり取りを重ねて違いを認め合い、合意形成をする中で、自分が思いもしなかったアイディアが浮かんでくるもの。

ウ　物事の受け止め方の違いを言語化して他者とやり取りするうちに、自分に豊かさや複雑さを与えてくれるもの。

エ　違和感があったり共感できなかったりすることを、合意形成を求めずに表明し合うことで、自分をより豊かにしてくれるもの。

問六 D「金魚鉢」とは、どのような社会をたとえたものか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア 移行期的混乱にある世界情勢の中で、かろうじて他国からの悪影響を防ぐことができているような、もろくて壊れやすい社会。

イ コミュニケーションを重ねるうちに、周囲との違いを認め合ったり、調整したり、合意形成を果たしたりできるような社会。

ウ 自分たちがいま生活する場所が、金魚鉢のように閉ざされた狭い空間であると自覚し、問題視することができる社会。

エ コミュニケーションの場を管理されて強い同質化圧力が働く中で、硬直した価値観や規範に適応せざるを得ないような社会。

問七 「人文学」という学問について、筆者はどのように考えているか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア 歴史的な視野をもって単一の基準を設けることで、世界はどこから来て、いまどんな状態にあり、これからどう変わろうとしているのかなどを考えさせる学問。

イ 閉ざされた狭い空間の中にいながら、生き延びていくために、同時代のさまざまな濃淡の差がある同意や共感を言葉にして、やり取りを重ねていく学問。

ウ 現在目の前にある社会の成立や構造を、広い時間的・空間的な視野をもって知ることで、今の世界の状況や、今後どうしていくべきかなどを考えさせる学問。

エ 自分たちが閉じ込められている空間のシステムや構造を知るために、考古学、歴史学あるいは民族学など、特定の分野にしぼって深く探求していく学問。

第三問 次の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

1 不意の訪れをアヤしむ。
2 ユカイな音楽が流れる。
3 雨戸が光をサエギる。
4 お世話になったオンを返す。
5 シハンされている薬を服用する。
6 煩雑な手続きを済ませる。
7 桑の実が潰れる。
8 雌雄を決する。
9 教育現場に携わる。
10 声を出して威嚇する。

第四問　次の各問いに答えなさい。

問一　次の(1)、(2)の傍線部の用言と活用形が同じものを、後のア～エの傍線部からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

(1)　セーターを着ないで出かける。

ア　柔らかな笛の音が聞こえる。　　イ　今日は朝早く起きた。

ウ　早ければ早いほどいい。　　エ　あの料理はさぞおいしかろう。

(2)　空がだんだん赤くなっていった。

ア　雨がやんだら外に出よう。　　イ　すぐに来いと言われる。

ウ　大きな声で発表した。　　エ　手紙を書く回数が増える。

問二　次の(1)、(2)の文の［　　］の語が修飾しているのは、後の傍線部ア～エのうちどれか。それぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

(1)　［もはや］　私たちの ア チームは イ 二位以上の 入賞は ウ 見込めないので、がんばって 三位を エ 目指すのだ。

(2)　私は　去年　［初めて］　ア 上野動物園の　パンダが　飼育されているのを イ 見て、とても　印象に ウ 残ったことを エ 覚えています。

問三　次の文を単語に分けると、いくつになるか。最も適当なものを、後のア～エから選び記号で答えなさい。

母は深刻な表情で部屋に入り話を始めた

ア　十一

イ　十二

ウ　十三

エ　十四

第五問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈神無月の頃、*1栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遥かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる*2懸樋のしづくならでは、つゆ*3A おとなふものなし。*4閼伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。〉

かくてもあられけるよと、B あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる*5柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、C この木なからましかばと覚えしか。

（兼好法師「徒然草」による）

【注】

*1 栗栖野…京都にある地名。
*2 懸樋…山から水を引くための、竹で作ったとい。
*3 おとなふ…音をたてる。
*4 閼伽棚…仏に供える水や花を置く棚。
*5 柑子…みかん。

問一 〈 〉の部分の内容の説明として、あてはまらないものを、次の選択肢から一つ選び記号で答えなさい。

ア 苔むした細道の先に、心細そうに人が住んでいる庵があった。
イ 懸樋の水滴の音しかしないことから、住人が留守であることがわかる。
ウ 筆者は神無月の頃に、栗栖野を通り過ぎてある山里に分け入った。
エ 菊や紅葉などが折り散らしてあることから、住人のいることがわかる。

問二 A「おとなふ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問三 B「あはれに見るほどに」の現代語訳として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア かわいそうだと感じて見ていると
イ 興味をそそられるように見えるけれど
ウ 心細いことだと思って眺めているときに
エ しみじみと感心して見ているうちに

問四 C「この木なからましかば」と筆者が思ったのはなぜか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

ア 木を厳重に囲わなければならない世の中の情勢を嘆いたから。
イ みかんの木の周囲が厳重に囲ってあることに興ざめしたから。
ウ 木が囲ってあって、みかんをとれないことが残念だったから。
エ 美しい景色をみかんの木が隠してしまい、興味をそがれたから。

〈問題はここまで〉

二〇二二年度　尚絅学院高等学校　入学試験問題

解答用紙〔国語〕

A日程

＊の欄には記入しないこと。
句読点、記号は全て一字に数えること。

受験番号
得点
＊

第一問

＊

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

第二問

＊

問一　X

Y

問二　Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問三

問四　自分は、

という意味。

問五

問六

問七

第三問

＊

※楷書（かいしょ）で大きく丁寧に書くこと。

1 しむ

2

3 る

4

アヤ

ユカイ

サエギ

オン

5

6

7 れる

8

シハン

煩雑

潰

雌雄

9 わる

10

携

威嚇

第四問

＊

問一

(1)

(2)

問二

(1)

(2)

問三

第五問

＊

問一

問二

問三

問四

二〇二二年度　尚絅学院高等学校　入学試験問題

解答用紙〔国語〕

A日程

＊の欄には記入しないこと。
句読点、記号は全て一字に数えること。

受験番号
得点
＊

第一問

＊

問一 ウ　問二 エ　問三 イ

問四

和	美	が	い	つ	も	、	心	の	中	の	千	里	の	フ	ィ
ル	タ	ー	を	通	し	て	万	里	を	見	、	万	里	そ	の
も	の	を	見	て	く	れ	な	い	こ	と	。				

問五 ア　問六 イ　問七 ウ

第二問

＊

問一 X イ　Y エ

問二 Ⅰ イ　Ⅱ オ　Ⅲ ウ

問三 イ

問四

他	の	人	の	発	言	へ	の	全	面	的	な	同	意	や	共
感	を	誇	示	で	き	な	い	か	ら	コ	ミ	ュ	ニ	ケ	ー
シ	ョ	ン	が	へ	た	だ									

自分は、
という意味。

問五 ウ　問六 エ　問七 ウ

第三問

＊

※楷書（かいしょ）で大きく丁寧に書くこと。

1 怪（しむ）　アヤ
2 愉快　ユカイ
3 遮（る）　サエギ
4 恩　オン
5 市販　シハン
6 はんざつ　煩雑
7 つぶ（れる）　潰
8 しゆう　雌雄
9 たずさわる　携
10 いかく　威嚇

第四問

＊

問一 (1) エ　(2) ウ

問二 (1) ウ　(2) イ

問三 イ

第五問

＊

問一 イ

問二 おとのう

問三 エ

問四 イ